

修了生インタビュー 大橋 均さん（2022 年度修了生）

現場と研究をつなぐ学びの実践

立命館小学校から現職教員派遣で本研究科に入学され、2 年間学ばれた 5 期生の大橋均さんにお話を伺いました。修了後は兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士課程）に進学し、現場での実践と研究を両立させながら論文を執筆され、2026 年 9 月に博士（学校教育学）の学位を取得されました。聞き手は、当時のゼミ指導教員でもあった伊田副研究科長です。

——教職研究科を修了された後、兵庫教育大学の連合大学院・博士後期課程に進学されましたが、その動機を教えてください。

大橋：教職研究科の 2 年間のうち、研究の入り口に立てたのは実質的に後半の 1 年だけで、前半の 1 年は授業が中心で、学部教育の延長のような感覚がありました。修了する頃になって、もっと研究というものをやってみたいという気持ちが強くなったんです。在学中に取り組んだ「教育実践探究論文」も、形だけでもいいから書いておいてよかったと今振り返って思います。あれがあったからこそ、次の一步につながりました。

——現職の教員として研究を続けることには難しさもあると思います。どのように感じていますか。

大橋：理論と実践の往還は、口で言うほど簡単ではありません。特に修了後も研究を継続できるかどうかは大きな壁になります。一方で、現場に身を置いているからこそ研究がしやすい面もあります。日々の授業そのものがアクション・リサーチの舞台になるというのは、現職教員ならではの強みだと感じています。ここまで積み上げてきたものを考えると、現職教員がこの土俵で研究をやらないのはもったいないとさえ思います。

——研究を続けるうえで、活用された制度や仕組みはありますか。

大橋：立命館学園としてのバックボーンが整っていたことは大きかったです。グラスルーツ制度（学内の研究助成制度）や科研費の奨励研究に採択いただき、学会参加や論文投稿、海外視察といった活動を重ねることができました。学内の教員と共同で研究を進めることもありました。「教材研究は教員が自腹で」という発想からは脱却する必要があると考えていて、だからこそ自分から研究費の獲得に動いてきた、という面もあります。

——博士課程への進学は、具体的にはどのように進められたのですか。

大橋：いくつかの大学院を自分で調べて、直接メールで連絡を取り、兵庫教育大学の連合大学院・博士後期課程への進学を決めました。「査読論文を1本書いてから博士後期課程に入るべき」と言われることもありますが、実際に経験してみると、たしかにその通りだと感じます。修士2年の最後、2～3月頃に投稿し、博士1年は査読対応をしながら並行して実践のバージョンアップにも取り組み、修士2年と博士1年の2年間で積み重ねた実践のデータが、博士論文の対象になっています。

——研究の内容について伺えますか。

大橋：小学校高学年を対象に、2カ年にわたる比較研究を行いました。参照したのは、北米・カナダで展開されているUDL（学びのユニバーサルデザイン）の考え方です。従来の問題解決型授業では、自力解決や援助要請が難しい子どもが「わかっているふり」でやり過ごしてしまう課題がありましたが、UDLに基づく工夫やBTC（Building Thinking Classrooms）と呼ばれる、少人数グループで立ちながら考えを練り上げていく手法を組み合わせることで、多様な子どもを包摂しながら深い思考を引き出せないかと考えています。

——研究の成果として、どのようなことが見えてきていますか。

大橋：全学力層の学力低下を防ぐ効果、特に中上位層への効果が見えてきています。単年度だけでなく、コホート比較でも再現性・頑健性のあるエビデンスが得られていると考えています。

——学会活動や、そこでのつながりについても教えてください。

大橋：学会報告には毎年取り組むようにしています。所属しているのは、日本教育工学会、日本LD学会、JSSEP（教育実践学研究、教育工学会系）、日本学校心理学会に加え、学内学会誌（紀要）にも投稿しています。次の目標として、国際学会への投稿を考えているところです。

いろいろな先生方に、自分から積極的にアプローチして援助要請を出していくことが大事だと感じています。人脈は、待っていてもできません。学会でのポスター発表も、教職研究科在籍時に審査や報告会を経験したことが、後々の場面で生きてきたと思います。誰かに相乗りさせてもらうような形であっても、まずは入り口まで連れて行ってもらえることには大きな価値があります。

——現場への社会還元という点では、どのような活動をされていますか。

大橋：知り合いの大学教員からの紹介や、教育委員会からの依頼を通じて、各地の教員研修で講義やワークショップの講師を担当させていただく機会が増えています。

——最後に、博士（学校教育学）の学位を取得された論文のテーマと、今後の展望を教えてください。

大橋：博士学位論文のテーマは「UDL の授業デザインに基づく実践と効果検証」です。
今後も現場での実践を重ねながら、国際学会への投稿など、研究をさらに広げていきたいと考えています。

現職教員として教職研究科での学びを研究の「入り口」とし、そこから博士後期課程へと歩みを進め、理論と実践の往還を粘り強く続けてこられた大橋さんの姿は、現場に軸足を置きながら研究を志す修了生・在学生にとって、大きな励みとなることでしょう。今後のさらなるご活躍を期待しています。